

S-HTPP 法にみられる全体的印象の性差

中京大学心理学部 近藤 孝司

Global impression of S-HTPP in male and female

KONDO, Takashi (School of Psychology, Chukyo University)

Relationship between the global impressions of the Synthetic House-Tree-Person-Person (S-HTPP) drawings and object relations was examined. S-HTPP and Object Relations Scale (Iume, 2001) were administered to undergraduate and graduate students (n=227, 84 men and 143 women). The global impression was rated using the impression rating scale that was constructed based on S-HTPP characteristics. Cluster analysis of this data extracted four factors that were classified into four clusters. Gender differences on four clusters were analyzed using a t-test, which indicated that men often drew pictures with an integrated feeling, whereas women drew pictures with a warm feeling. Furthermore, the results of a two-way analysis of variance with clusters and sex as independent variables and sub-categories of the Object Relations Scale as dependent variables indicated that there were no significant differences between the clusters in men, whereas factors of "difficulty in keeping relationships" affected the global impressions in women. Moreover, it was suggested that the meaning of global impressions was different between men and women. Above results indicate not only the global expressions in the drawings, but also relevant personality variables are different between the genders. It is suggested that gender differences might be a significant variable in the interpretation of drawings.

Key words: S-HTPP, global impression, object relations

問題と目的

S-HTPP 法 (Synthetic-House Tree Person Person) は、1枚の画用紙に「家・木・男の人・女の人」を描く描画法であり、近藤 (2006) が HTP 法 (Buck, 1948) の応用として提案した。この技法の特徴は、それぞれ異なるパーソナリティ側面を象徴する描画課題を1枚に描くことにあり、それぞれの描画課題の関連付けや Gestalt としての表現には、自己と他者・環境のあり方が投映されるという利点がある。これまでに、対象関係 (近藤, 2009a)、自己愛 (近藤, 2009b)、第2の分離個体化 (近藤, 2010) と、描画特徴との関連を検討してきた。その結果、人物像の表情や顔の向きに、自己と他者との関係性が表れることを確認した。

これらの研究は、描画表現の細部を数種類の項目に分類することで描画表現の特徴を捉えてきたが、当然ながらこのような単純化には、“結果が常にまとまった形 (Gestalt Form)” (三上, 1995) と形容される描画法の原則から離れるものでもあり、この視点に考慮した研究が求められる。そこで本研究は、Gestalt を表す指標として全体的印象を取り上

げる。

描画全体の整っている、安定している、空虚である、あたたかみがあるといった全体的印象には、描き手の重要な情報が含まれていることが、多くの研究者や臨床家によって繰り返し指摘されている (Koch, 1953; 青木, 1980; 高橋, 1974; 三上, 1995 など)。全体的印象に関する研究として、統合失調症者の鑑別を目的にした研究がある (市橋, 1974; 須賀, 1985)。森田 (1989) は、統合失調者の S-HTP 法の全体的印象を SD 法で評定し、「統合的現実性」、「快適感」、「空間性」、「色彩の豊かさ」の4因子を抽出した。統制群との比較を行ったところ、どの因子においても有意な差異が確認され、経過類型群間の比較では、寛解型は荒廃型より「統合的現実性」得点が有意に高かった。このことから描画法の全体的印象には鑑別能力があること、統合失調症の予後指標としての有用性が示唆された。このことは他の研究でも示唆されている (横田ら, 2002)。この他に、登校拒否児 (一谷ら, 1975)、児童虐待児 (大和田・阪, 2007)、非行少年 (脇野, 1988) を対象にした研究がある。

一方で、描画の印象には性差があることが確認さ

れている。特に子どもについてその傾向が顕著であり、皆本(1991)は、男児は構図に関心があり、リアリズムの傾向をもち、また動的で戦場指向の絵を描き、女性は色彩に興味があり、空想的な描写をし、静的で楽園指向の絵を描く傾向があると述べている。発達に伴い、社会的・文化的影響によって描画の全体的印象の性差は縮むが、青年期や成人期以降でも描き手の性別が伺わせる一定の表現傾向は残るのではないかと考えられる。しかし、性差を考慮した全体的印象に関する研究は少ないため(脇野, 1988; 小川ら, 1997)、本研究では性差を含めて検討を行う。

そこで本研究は、描画の全体的印象とパーソナリティ傾向との関連を明らかにすることを目的とする。S-HTPP法は、自己と他者との関係性をみることを目的とした技法であり、検討するパーソナリティ傾向として対象関係を取り上げる。

方法

1. 調査協力者

A県内の2つの大学の大学生・大学院生227名(男性84名, 女性143名, 平均年齢21.0歳, SD±3.4歳)である。

2. S-HTPP法

A4判の画用紙, B4の鉛筆, 消しゴムを用意し、画用紙を横向きに置いた状態で、「この1枚の画用紙に、家と木と男の人と女の人をいれて、何でも好きな絵を描いてください」との指示で実施した。棒人間でもいいか、何人でもいいかなどの質問があれば、極力「自由でかまいません」と回答した。

3. 対象関係尺度(井梅, 2001)

先行研究を基に作成され、家族や友人など特定他者との関係性ではなく、人間一般に対しての関係の在り方に焦点を置いた対象関係を捉えるための尺度である。「回避性」、「自他の境界未分化」、「自己中心性」、「関係性維持の困難」、「見捨てられ不安」の5つの下位尺度、計38項目から構成されている。これを6件法で回答してもらった。

4. 手続き

調査協力者に同意と理解を得た上で、講義後に集団式でS-HTPP法を実施し、対象関係尺度の質問

紙を配布して回答を求めた。

結果

1. 対象関係尺度の信頼性の検討

「回避性」、「自他の境界未分化」、「自己中心性」、「関係性維持の困難」、「見捨てられ不安」の因子について α 係数を算出したところ、それぞれで.743, .778, .757, .747, .812という数値が得られた。一部の因子で低い値が得られたが、尺度使用に支障はないと判断し、本研究で使用した。

2. 印象評定尺度の作成

印象評定を扱った研究の多くは、先行研究の尺度を参考にして、用いる技法に適した印象評定尺度を作成しているものがほとんどである。そこで本研究では、S-HTPP法の技法特徴に適した尺度を新たに作成する。まず、大学院生3名に対し、本研究とは別の47枚のS-HTPP法を提示し、全体的印象を表す単語を自由に記述してもらった。特殊な意味をもつ単語や個人によって受け取り方に大きな差の出るような単語を除き、また意味の類似する単語を整理して44項目の予備尺度を作成した。次に、別の大学院生と筆者を含めた4名で、本研究とは別のS-HTPP法60枚を予備尺度にて評定した。因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行い、スクリープロットから4因子解を採用し、因子負荷量0.40以上の22項目をS-HTPP法印象評定尺度とした。

本研究の調査協力者227名のS-HTPP法を、大学院生2名と筆者の計3名で、S-HTPP法印象評定尺度を用いて評定した。得られたデータの合計得点を因子分析(主因子法・バリマックス回転)で分析した結果、スクリープロットから4因子解を採用した(表1)。因子負荷量が.35以上の項目を、その因子を構成する項目とした。複数の因子に重複する項目は、その因子を構成する項目として採用し、これを合成因子とした。

第1因子は、「生き生きとした」や「楽しそう」、「さみしい」(反転項目として扱う)など12項目からなり、情緒的で感情的なあたたかさを示す内容から、「情緒的あたたかさ」と名づけた。第2因子は、「奥行きがある」や「立体的な」、「羅列的な」(反転項目)など7項目からなり、立体表現、空間構成のまとめ、描画課題の関連の程度を表す内容から、「統合感」と名づけた。第3因子は、「細かい」(反

表 1 S-HTPP 法印象評定尺度の因子分析結果と因子間相関係数

項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	共通性
1 生き生きとした	.89	.09	-.15	-.09	.83
8 楽しそう	.87	.11	-.08	-.14	.80
2 さみしい	-.83	-.01	.03	.18	.72
5 生気のない	-.81	-.11	.16	.21	.74
20 にぎやかな	.80	.15	.01	.01	.67
4 幸せな	.78	.12	-.10	-.22	.68
14 かわいい	.78	.06	-.14	-.32	.73
22 親しみのある	.73	.22	-.25	-.35	.76
21 豊かな	.70	.33	-.31	-.22	.74
7 静か	-.60	.04	.00	.03	.36
16 奥行きのある	.06	.81	-.18	-.10	.70
11 立体的な	.09	.78	-.20	.04	.67
17 羅列的な	-.11	-.77	.29	.11	.70
6 統合されている	.32	.52	-.26	-.14	.46
13 細かい	.09	.36	-.72	-.10	.67
18 おおざっぱ	-.12	-.07	.67	.45	.68
12 シンプル	-.12	-.44	.66	-.02	.65
3 簡略化されている	-.31	-.31	.66	.04	.62
15 繊細な	-.09	.37	-.51	-.04	.41
10 怖い	-.46	-.16	.09	.74	.80
9 不気味な	-.51	-.13	.09	.69	.76
19 粗い	-.17	.03	.49	.54	.55
因子 1 相関係数		.33**	-.46**	-.85**	
因子 2 相関係数			-.82**	-.46**	
因子 3 相関係数				.70**	

**p<.01

表 2 評定者間相関係数

評定者 因子	A				B				C			
	1 情緒的あたたかさ	2 統合感	3 力量感	4 不気味さ・非現実感	1 情緒的あたたかさ	2 統合感	3 力量感	4 不気味さ・非現実感	1 情緒的あたたかさ	2 統合感	3 力量感	4 不気味さ・非現実感
A 1 情緒的あたたかさ		.210**	-.267**	-.838**	.854**	.365**	-.500**	-.716**	.830**	.219**	-.331**	-.566**
A 2 統合感			-.743**	-.307**	.151*	.737**	-.490**	-.140*	.193**	.713**	-.547**	-.290**
A 3 力量感				.535**	-.231**	-.633**	.636**	.297**	-.258**	-.661**	.699**	.417**
A 4 不気味さ・非現実感					-.740**	-.435**	.624**	.767**	-.717**	-.365**	.501**	.642**
B 1 情緒的あたたかさ						.423**	-.519**	-.813**	.840**	.202**	-.328**	-.550**
B 2 統合感							-.787**	-.432**	.408**	.731**	-.642**	-.492**
B 3 力量感								.705**	-.540**	-.611**	.734**	.667**
B 4 不気味さ・非現実感									-.713**	-.307**	.470**	.668**
C 1 情緒的あたたかさ										.333**	-.453**	-.753**
C 2 統合感											-.816**	-.570**
C 3 力量感												.762**

*p>.05 **p<.01

灰色の項目は、その因子における評定者間の相関係数を表す

転項目)や「おおざっぱ」,「シンプル」など6項目からなり、描画のエネルギーや大きさ、筆線の荒さを表すことから、「力量感」と名づけた。第4因子は、「親しみがある」(反転項目)や「おおざっぱ」,「怖い」など5項目からなり、非現実的な描写で、怖さや不気味さといった否定的な感情が色濃く反映

された内容であることから、「不気味さ・非現実感」と名づけた。

評定者間の一致率をみるために、各因子における3名の評定者間の相関係数を求めた(表2)。その結果、最低が.642であったが、3名の評定者間一致率は比較的高いと言える。また、3名の評定者の各



図1 あたたかさ優位群の描画例

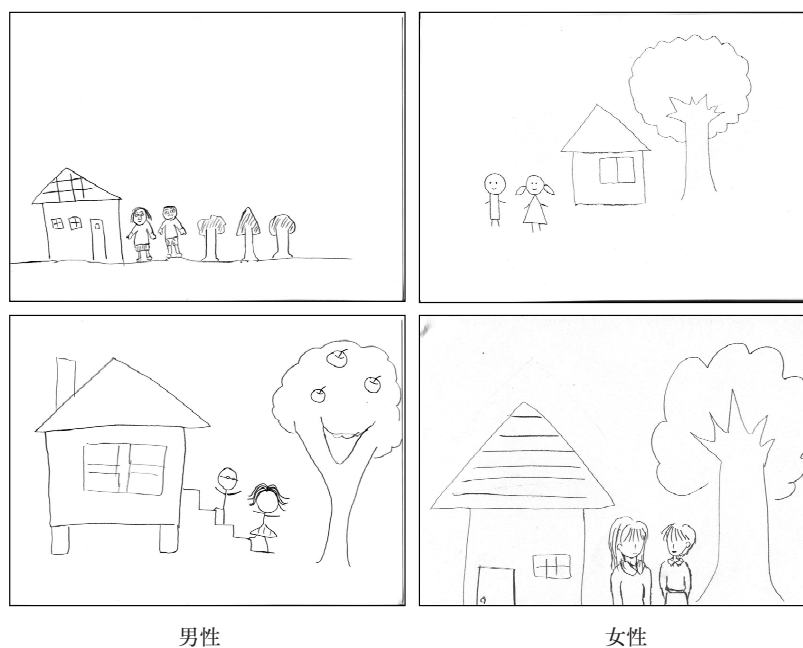


図2 力量・不気味さ優位群の描画例

因子における信頼係数を算出したところ、最低の値が.768となったが、全体的に数値は高く、尺度の使用に適切であることが示唆された。

3. S-HTPP 法印象評定尺度のクラスタリング

印象評定尺度の因子間相関をみると(表1)、全ての合成因子間の相関係数が高かった。「不気味さ・非現実感」の5項目のうち3項目は、「情緒的あたたかさ」と重複しているため、両者の合成因子

間相関係数は-.845であった。同様に、「力量感」の6項目のうち3項目は、「統合感」と重複し、両者の相関係数は-.816という値になった。因子の完全な分離は困難であることから、合成因子得点の高低の組み合わせでの分類が妥当であると考えられ、階層クラスタ分析(Ward法)を用いて調査協力者の分類を試みた。得られたデンドログラムから、4クラスタの解釈が妥当であると考えられた。

クラスタI(n=87)は、「情緒的あたたかさ」が

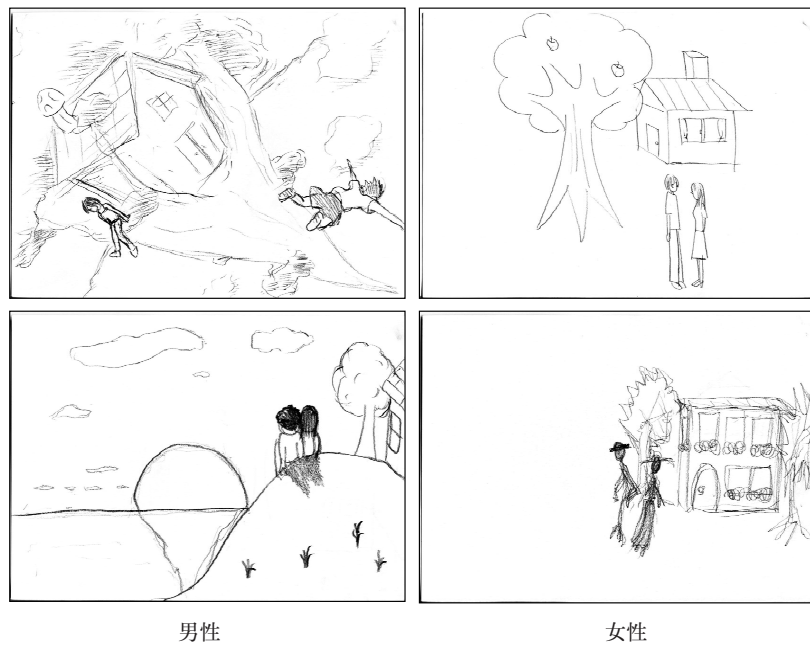


図3 統合感優位群の描画例

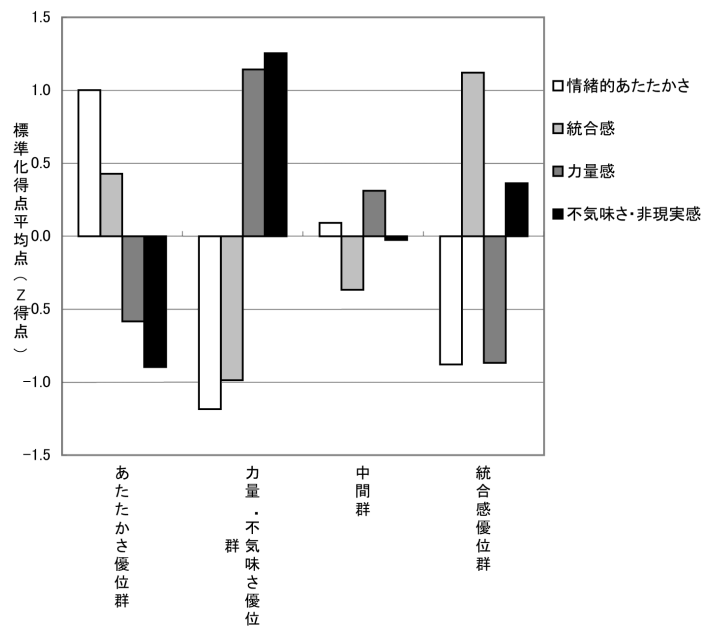


図4 印象評定4クラスタの特徴

高いが、他の合成因子が低く、絵全体が情緒的な雰囲気や温かみの感じられる特徴をもっていることから、「あたたかさ優位群」と名づけた(図1)。クラスタII (n=54) は、「力量感」と「不気味さ・非現実感」が高く、「情緒的あたたかさ」と「統合感」が低かった。力強く描かれているが、非現実的な描写や怖さを感じさせる絵が多く、あたたかみがなく、絵全体がまとまって描かれていないという特徴から、「力量・不気味さ優位群」と名づけた(図2)。クラ

スタIII (n=54) は、「力量感」がやや高く、「統合感」がやや低いという特徴以外に顕著な特徴がないことから、「中間群」と名づけた。クラスタIV (n=32) は、「統合感」が高く、「力量感」と「情緒的あたたかさ」が低かった。4つの描画課題を関連付けて、1枚の絵として完成しているが、力強さや感情的な色合いに欠けている。このような特徴から「統合感優位群」と名づけた(図3)。各クラスタの描画例は好ましいものを選定しないように、通

表3 性別ごとの対象関係尺度とS-HTPP法印象評定尺度の下位因子の平均値と標準偏差

尺度	性別	平均値	(標準偏差)	t値
回避性	男性	13.1	(6.4)	-.48(225)
	女性	13.5	(5.6)	
自他の境界未分化	男性	10.3	(5.8)	-2.07(202)
	女性	12.1	(7.1)	
自己中心性	男性	18.4	(7.3)	2.67(225)** 男性>女性
	女性	16.0	(6.3)	
関係性維持の困難	男性	12.1	(6.0)	-.78(225)
	女性	12.7	(5.0)	
見捨てられ不安	男性	18.1	(7.8)	-2.63(225)** 女性>男性
	女性	20.8	(7.2)	

**p<.01

表4 印象評定4クラスタの性別ごとの人数と検定結果

クラスタ	特徴	男性		女性		合計	
		人数	割合	人数	割合	人数	割合
クラスタI	あたたかさ優位群	10**	11.5%	77**	88.5%	87	100.0%
クラスタII	力量・不気味さ優位群	32**	59.3%	22**	40.7%	54	100.0%
クラスタIII	中間群	19	35.2%	35	64.8%	54	100.0%
クラスタIV	統合感優位群	23**	71.9%	9**	28.1%	32	100.0%
合計		19		35		227	

$\chi^2=52.53$ $df=3$ **

灰色の項目は有意に多いことを指す

**p<.01

し番号の小さい順に挙げた。またクラスタの特徴を視覚的に把握しやすいように、各クラスタにおける合成因子得点の標準化得点平均値を図4に示す。

4. 対象関係尺度と印象評定クラスタにおける性差

対象関係尺度の因子の性差を検討するため、男性と女性の各因子得点の差異をt検定で検定した(表3)。その結果、男性は女性より、「自己中心性」得点が有意に高く、「見捨てられ不安」得点が有意に低かった。印象評定尺度クラスタにおける性差をみるため、2変量の χ^2 検定を行った(表4)。その結果、「力量・不気味さ優位群」と「統合感優位群」では、男性が女性より有意に多かった。「あたたかさ優位群」では、女性が男性より有意に多かった。

対象関係尺度において性差が確認されたが、特に印象評定尺度クラスタにおいて顕著な性差がみられた。このことは、青年期・前成人期の男性と女性とでは、描画の表現に大きな違いがあることを指している。

5. 印象評定クラスタおよび性別と対象関係との関連

印象評定の4クラスタおよび性別と対象関係との関連を検討するために、印象評定4クラスタと性別

を独立変数、対象関係尺度下位因子得点を従属変数とした2要因分散分析を行った(表5)。その結果、「回避性」と「関係性維持の困難」で交互作用が有意であった。

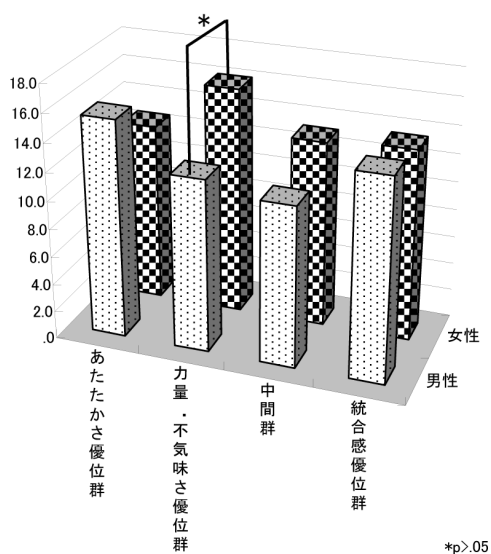
「回避性」について、性別の水準における印象評定4クラスタの単純主効果を検討したが、有意な差異は確認されなかった。印象評定4クラスタの水準における性別の単純主効果を検討したところ、「力量・不気味さ優位群」において性別の単純主効果が有意であり($F=(1,219)=5.73$, $p>.05$)、男性より女性の「回避性」得点が高かった(図5)。

「関係性維持の困難」について、性別の水準における印象評定4クラスタの単純主効果を検討したところ、女性において印象評定4クラスタの単純主効果が有意であり($F=(3,227)=3.28$, $p>.05$)、「あたたかさ優位群」より「力量・不気味さ優位群」の「関係性維持の困難」得点が高かった(図6)。印象評定4クラスタの水準における性別の単純主効果を検討したところ、「力量・不気味さ優位群」($F=(1,219)=6.25$, $p>.05$)と「中間群」($F=(1,219)=3.12$, $p>.10$)において性別の単純主効果が有意であり、両群ともに男性より女性の「関係性維持の困難」得点が高かった。

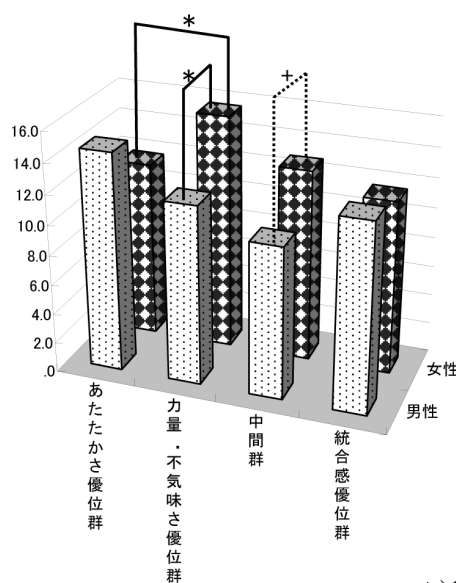
表 5 印象評定 4 クラスと性別の対象関係尺度下位因子得点の平均値 (標準偏差) と分散分析の検定結果

	あたたかさ優位群		力量・不気味さ優位群		中間群		統合感優位群		主効果		交互作用 (F 値)
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	印象評定 (F 値)	性別 (F 値)	
n	10	77	32	22	19	35	23	9			
回避性	15.5 (5.1)	12.7 (5.2)	12.3 (6.2)	16.2 (6.7)	11.5 (5.6)	13.3 (5.5)	14.4 (7.5)	13.7 (5.8)	1.05	.34	2.55+
自他の境界未分化	13.0 (8.2)	12.3 (7.4)	9.5 (5.1)	11.0 (6.3)	10.7 (4.8)	13.3 (6.7)	10.1 (6.2)	9.2 (7.2)	1.61	.34	.65
自己中心性	21.4 (4.1)	15.5 (6.4)	17.9 (7.9)	16.0 (6.9)	17.5 (6.9)	16.4 (5.7)	18.6 (7.7)	18.1 (7.1)	.59	4.55*	1.15
関係性維持の困難	14.6 (5.0)	11.8 (4.7)	12.0 (7.6)	15.7 (5.2)	10.2 (4.2)	12.9 (5.1)	12.7 (5.1)	11.7 (4.6)	1.77	.56	3.28*
見捨てられ不安	20.4 (8.7)	20.6 (7.5)	17.2 (7.5)	20.6 (7.1)	19.2 (7.0)	21.0 (6.6)	17.5 (8.5)	22.6 (8.6)	.38	4.55*	.64

+p>.10 *p>.05 **p<.01



*p>.05



+p>.10 *p>.05

図 5 印象評定 4 クラスと性別による回避性得点の平均値 図 6 印象評定 4 クラスと性別による関係性維持の困難の平均値

考察

1. S-HTPP 法の全体的印象における男女差

印象評定尺度に基づくクラスにおける男女差を検定したところ、男性は「力量・不気味さ優位群」と「統合感優位群」で、女性は「あたたかみ優位群」で有意に多く、性差があることが認められた。

描画表現には性別によって差があることが、古くから周知のこととして知られている。皆本 (1991) は、子どもの描く描画表現の傾向として、男児は、“対象の個別性を再現するリアリズムの傾向をもつ”，女児は，“画面上に樂園を築こうとする。したがって女性画は、美しいもの、きれいなもの、かわいらしいものをかくが、醜いもの、汚いもの、怖いものなどはかかない”という特徴があると述べている。また、男児は動的で写實的、戦場志向のモチーフ、女児は静的で空想的、樂園志向のモチーフの絵を描

く傾向がある (皆本, 1986; 村上, 2000)。このような男女差は、日本のみならず、ケニアでもみられることから、人間の生得的な表現傾向と結論づけられている (皆本, 1985)。このような差異は、年を重ね、文化的・社会的な影響を受けて縮まっていくが、男女差は完全に無くなるものではなく、表現に個々の個性が展開されながら、生得的な特徴を残していく (皆本, 1991)。本研究の結果は、青年期・前成人期の男女でも、生得的な描画傾向を有することを示している。

2. 全体的印象と性別、対象関係

描画の印象は、男女で異なることがわかったが、対象関係との関連においても男女差が認められた。「力量・不気味さ優位群」の女性は、「あたたかみ優位群」の女性より、「関係性維持の困難」得点が有意に高かった。「関係性維持の困難」は、友人や親しい人との関係に不安や困難を感じる、また人間関

係でのコミュニケーションに自信がないことを表す因子である。つまり、描線が荒く、不気味な印象のする女性のS-HTPP法には、人間関係の維持に関する不安と困難が表れており、一方で、あたたかみのある女性のS-HTPP法には、円満な人間関係が表れていると言える。しかし、男性ではこのような傾向が統計的に認められなかった。これは、男女における先天的な表現傾向と関連していると考えられる。

「あたたかみ優位群」の男女例を比較すると、男性は女性より、現実に近い人物像や家を描き、構図の完成度と写実性を求めることがわかる。「統合感優位群」で、男性の人数が女性より多いという結果と合わせると、男性は絵の完成度と現実場面に適合した描き方をすると考えられる。そのため、絵の巧拙に注目し、人間関係に関する態度が描画活動に反映されにくいのかもかもしれない。

一方の女性は、「あたたかみ優位群」の女性の例からわかるように、空想を膨らませ、かわいいものを描き、物語のある絵を志向している。「統合感優位群」で、女性の人数が男性より少ないという結果と合わせると、男性より女性の方が、感情的側面の強い描き方をするとと言える。S-HTPP法では対人場面を描くため、人間関係維持に関する不安や困難が直接的に全体的印象に反映されやすくなるのではないかと考えられる。

これらのことは、「力量・不気味さ優位群」において男女の「関係性維持の困難」と「回避性」得点に有意な差異が認められたことから支持することができる。「力量・不気味さ優位群」の男性の描画例には、描線が不安定で、棒人間で人物を描くなど、絵を上手に描けなかった、また描画になげやりになっているという印象が感じられる。一方、女性の描画例には、男女に交流がありながらも、人と人が相対する場面を描くことの困難さが感じられる。「力量・不気味さ優位群」は、4つの描画課題だけが描かれる必要最小限の表現という点で男女に共通しても、その描かれる意味は異なっているようにみえる。

このことは、描画を解釈する際、男女差を考慮することの重要性を指す。全体的印象を扱った研究の多くは、男女を合わせて検討している。しかし青年期・成人期においても生得的な描画表現傾向があり、パーソナリティ傾向の反映のされ方が異なっている。そのことを考慮して、「外在化されたイメージ」を読み解くことが重要になると考えられる。

3. 問題点と今後の課題

本研究から、S-HTPP法の全体的印象には男女差があり、その背景には、生得的な描画表現傾向があると示唆された。しかし、描画法には多くの技法があり、性差の表れ方も異なると考えられる。特に、感情が直接的に反映されやすい人物像を描く技法では、それが大きいのではないかと考えられる。今後はその点に注意し、基礎的な資料を収集する必要がある。

引用文献

- 青木健次 (1980). 描画法における全体的印象について 京都大学教育学部紀要, 26, 129-140.
- Buck, J. N. (1948). The H-T-P technique: A qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of Clinical Psychology*, 4, 317-396. 加藤孝正・萩野恒一 (訳) (1982). HTP 診断法 新曜社
- 市橋秀夫 (1972). 慢性分裂病者の体験構造と描画様式 芸術療法, 4, 27-36.
- 一谷 彊・津田浩一・林 勝造 (1975). S-D法によるバウムテストの因子的検討 — 診断のための探索的試み 京都教育大学紀要 A 人文・社会, 47, 1-16.
- 井梅由美子 (2001). 青年期・成人期を対象とした対象関係尺度作成の試み 人間文化論叢, 4, 311-319.
- Koch, C. (1953). *Der Baumtest: der Baumzeichnungsversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel*. 3rd edition. Bern: H. Huber. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 (訳) (2010). バウムテスト第3版 — 心理見立ての補助手段としてのバウム画研究 誠信書房
- 近藤孝司 (2006). 描画法での対象関係・対人関係のアクセスメント 平成17年度中京大学大学院心理学研究科 修士論文 (未公開)
- 近藤孝司 (2009a). 描画法による対象関係のアクセスメント — S-HTPPにおける、描かれた人物像の相互作用の検討 臨床描画研究, 24, 146-162.
- 近藤孝司 (2009b). S-HTPP法における自己愛の諸相 — 人物像の描画表現についての自己心理学からの理解 心理臨床学研究, 27 (3), 333-343.
- 近藤孝司 (2010). S-HTPP法における第2の分離個性の様相 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 10 (1), 21-35.
- 三上直子 (1995). S-HTP法 — 統合型HTP法による臨床的・発達のアプローチ 誠信書房
- 皆本二三江 (1985). 児童の描画におけるケニアとわが国の性差傾向の類似について 武蔵野女子大学紀要, 20, 149-161.
- 皆本二三江 (1986). 絵が語る男女の性差 東京書籍
- 皆本二三江 (1991). 絵画に現れる性差 臨床描画研究 Annex, 3, 112-128.
- 森田裕司 (1989). 統合型HTP法における分裂病者の描画特徴 — 全体的評価による因子分析 心理臨床学研究, 6 (2), 23-39.

- 村上 誠 (2000). 幼児の描画に表れる性差 浜松短期
大学研究論集, 56, 165-189.
- 小川芳子・黒須美智子・斉藤亜矢子 (1997). 樹木画テ
ストからみる心理学的性差 共立薬科大学研究年報,
42, 47-55.
- 大和田攝子・阪 永子 (2004). KFD (動的家族画) に
見られる被虐待児の特徴 研究紀要人文科学・自然
科学篇, 45, 1-14.
- 須賀良一 (1985). 慢性分裂病における統合力の検討 —
— 分裂病者の描画数量化 3 類による分析 臨床精神医
学, 14 (5), 801-809.
- 高橋雅春 (1974). 描画テスト入門 — HTP テスト
文教書院
- 脇野満寿美 (1989). 描画に現れる家族イメージ — 非
行少年と一般少年の家族画の比較を通して 障害児
教育研究紀要, 11, 49-63.

(受理年月日 2012 年 1 月 20 日)